代への検証に耐えられるように、生物種の標本を保管管理していくことが必要です。

以上のような生物多様性を支える基盤が必要なことから、奈良の生きものなどについての相談窓口を一本化し、自然環境教育の拠点となる生物多様性センターの機能を持つ拠点の設置を目指します。

3. 期間

◆短期目標

2020年まで

①現に絶滅の危機に瀕した種の個体数や生息・生育環境の維持・回復を図る。

②生物多様性の分析、把握に努め、外来種防除対策や野生鳥獣の保護管理を強化する。

③生物多様性を減少させない仕組みを構築し、世代を超えて生物資源の持続可能な利用を行う。

④生物多様性を活用した地域の活性化を図る。

⑤生物多様性の恵みに対する理解を県民に浸透させる。

⑥生物多様性センターの機能を持つ拠点を設置する。

◆中長期目標

2050年まで

①人と自然の共生を各地域レベルで実現させ、生物多様性の状態が豊かで、そのことを県民が誇りに思ってくらすことを目指す。

②豊かな自然環境と伝統ある歴史文化が融和した、美しいふるさと「奈良」を次世代に引き継いでいく。

■生物多様性の恵みを「五感で楽しむ」

野山の草花や樹木、虫、動物などに「五感」でふれてみましょう。植物や昆虫の精妙な構造をルーペで観察したり（視覚）、耳を澄ませて野鳥の声を聞き分けたり（聴覚）、草花の香りを嗅ぎ比べたり（嗅覚）、甘い木の実を食べたり（味覚）、木肌の優しい感触を確かめたり（触覚）、五感のすべてを使って生物多様性の恵みを楽しみましょう。

①伝統色の奥深さに癒やされよう（視覚）

染料は植物から採取されます。紅花の花弁、紫草の根、茜、藍など、自然の恵みが日本の伝統色を生み出してきました。万葉の時代から大自然の美しい色に憧れ、その色を再現してきました。蘇芳（すおう）はインド・マレー原産の豆科植物で、その心材部および実を煎じて染料としますが、飛鳥・奈良時代から中国を経て輸入され重要な赤色染料とされてきました。蘇芳色は黒みを帯びた赤色で奈良県の県章にも使われています。露草は古名を着草（つきくさ）といい、万葉の人はその花汁を摺染（すりぞめ）の染料に用いていたのです。

露草：万葉の時代から歌人たちに愛され続けてきた花です。

②自然のリズムや息づかいを感じよう（聴覚）

大峰山系や台高山系は、県鳥のコマドリをはじめアオバト、コルリ、ジュウイチ、ツツドリ、トラツグミ、コノハズクなど希少種を含むさまざまな野鳥の繁殖地です。さえずり上手は雌を引きつけます。雄は相手が見つからないと子孫を残すことができないので必死です。さえずりは縄張りと異性への求愛を示すもので、人間のために鳴いているのではありませんが、人々は昔から鳥のさえずりに何かを感じてきたのでしょう。

ホトトギスは万葉集で150首以上と野鳥の中で最も多く詠われています。

うぐひすの　卵（かひご）の中に　ほととぎす　ひとり生れて　己（な）が父に　似ては鳴かず　己（な）が母に　似ては鳴かず・・・・・

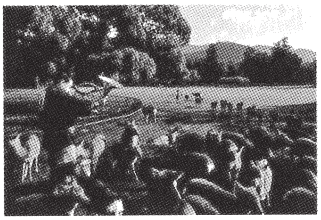
（高橋虫（むし）麿（まろ）　万葉集　巻九　一七五五）

ウグイスの卵の中にホトトギスが一羽生まれて、お前の父や母であるウグイスのようには鳴かないようだ。・・・・・

ホトトギスは自分で巣をつくらず、産んだ卵をほかの種に預け、子育てをしてもらいます。これを託卵といいます。ホトトギスがウグイスに託卵することは万葉集の頃からすでに知られていました。

万葉人は秋に鳴く虫をすべて蟋蟀（こおろぎ）と呼んでいました。また、セミの歌10首のうち９首までがヒグラシという種名で詠まれています。万葉集の20首に詠まれているカエルは、だいたいが、「河鹿蛙 (カジカガエル)」といわれています。

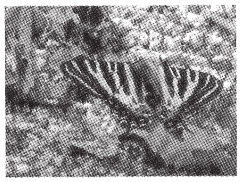
環境省「残したい日本の音風景100選」に選定された「春日野の鹿と諸寺の鐘」



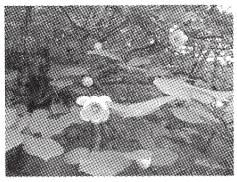
鹿の呼び声をやさしく包む古寺の鐘の響きが、古都奈良の町と人々に安らぎを与え続けています。

③「奈良」の四季の香りを満喫しよう（嗅覚）

古都奈良も、明治、大正、昭和、そして平成とわずか100年ほどの間に、大きく変わりました。その間、自然との共生の智慧や技術が失われつつありますが、今もなお、季節が醸し出すなつかしい香りが残っています。



春：春の女神ギフチョウ



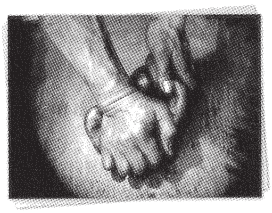
初夏：オオヤマレンゲ

秋：棚田と柿

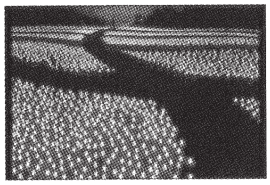
冬：三峰山の霧氷

「かおり風景100選」に選定された「ならの墨づくり」と「なら燈花会のろうそく」

自然や文化と一体になった良い「かおり」と「風景」を将来に残し、伝えるべく、環境省では「かおり風景１００選」として全国100か所を選定しています。



「ならの墨づくり」 奈良墨は興福寺でたまった灯明のススを集めた油煙が起源といわれています。



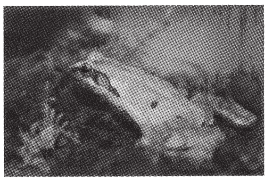
「平成11年に誕生した『なら燈花会』。夏の10日間だけ、広大な奈良の緑と歴史の中にろうそくの花が咲きます。

④旬の恵みを食べて、楽しみ、感謝しよう（味覚）

四季の変化の中で、旬の食材や奈良県でとれたものを存分に味わいます。生きものの賑わいが食の安全･安心を保証する「ふるさと奈良」の豊かさに感謝しつつ、「やまと」産の、生物多様性の恵みを楽しみます。

浄見原神社国栖奏

国栖奏は、吉野川沿いの崖の上にある浄見原神社で、旧暦一月十四日に行われる例祭のことです。神饌として、腹赤の魚（うぐい）、醴酒［こざけ］（一夜酒、にごり酒）、土毛［くにつもの］（根芹）、山菓（木の実、栗やかしの実）とともに毛瀰［もみ］（蛙）を供えます。



［もみ］ヤマアカガエル

日本書紀「応神天皇の時代」に、天皇が吉野宮に来られたとき、国栖の人びとが来て一夜酒をつくり、歌舞を見せたのが、今に伝わる国栖奏の始まりとされています。さらに、今から1,300年ほど昔、天智天皇の跡を継ぐ問題がこじれて戦乱がおこりました。世にいう壬申の乱で、天智天皇の弟の大海人皇子は、ここ吉野に兵を挙げ、天智天皇の皇子、大友皇子と対立しました。戦いは約１ヶ月で終わり、大海人皇子が勝って天武天皇となりました。この大海人皇子が挙兵したとき、国栖の人は皇子に味方して敵の目から皇子をかくまい、また慰めのために一夜酒や腹赤の魚（うぐい）を供して歌舞を奏しました。これを見た皇子はとても喜ばれて、国栖の翁よ。と呼ばれたので、この舞を翁舞というようになり、代々受け継がれて、毎年旧正月14日に天武天皇を祭る、ここ浄見原神社で奉納され、奈良県無形民俗文化財に指定されています。（吉野町観光課）

腹赤の魚（うぐい）

⑤ふるさとの自然とのふれあい、自然の感触を楽しもう（触覚）

素足で田植え、素手で魚取り、さまざまな自然とのふれあいを通じて、自然の質の違いや風景の変化を読み解く力と想像力を養います。腐葉土のやわらかな感触を楽しみながら森を歩くことも生物多様性の恵みの一つです。

うだ・アニマルパークは、人と動物とのふれあいを通して「いのちの教育」「生きる力」をはぐくみ、動物全般に対する理解を促進するとともに動物を大切にすることについて、普及啓発を図り、豊かな社会づくりに寄与することを目的とした施設です。動物学習館やふれあい広場ではヤギやヒツジのエサやりやウシの乳しぼり体験などができます。園内のさまざまな動物とのふれあい楽しむことは、その多様性に気づき、それぞれの動物が必要としている食べ物、飼育環境などの違いを学ぶことになり、ひいては動物だけでなく、他人に対し、相手の立場を理解し、思いやりや命を大切にする気持ちが生まれるなどの教育効果も期待されるところです。また、併設されている鳥獣保護施設は「救護獣医師」・「保護しようボランティア」と協働して、ケガや病気の鳥獣を野生復帰させるための保護施設です。傷病鳥獣の検査、治療、リハビリ、飼育などのほか野生鳥獣保護に関する普及啓発を行っています。

ヒツジの放牧場